研究室散歩!!

@資源管理と国際協力

現地で資源の使い方を研究

佐藤 仁（さとう じん）准教授
（新領域創成科学研究科）
98年総合文化研究科博士課程修了。00年より現職（当時・助教授）。

途上国の貧困層が依存しているのは、身の回りで直接利用できる資源。貧困層の生活を考える上で、資源とのかかわりは見逃せない。佐藤仁准教授（新領域創成科学研究科）は資源の利用や資源分配の支配を研究するため、海外にもよく赴く。

◇

佐藤准教授が学生だった90年代初頭、開発に関する授業の多くは、豊かさを所得増加と見なして教えていた。「発展」を巡るより深い考えを求め、佐藤准教授は米国に留学した。

米国では『貧困の克服』（集英社新書）などで知られる後のノーベル賞受賞者アマルティア・センセン氏に師事。さらに、世界銀行でのインターンシップで上司に「貧困層とは公共資源への依存が高い人々のこと」と教わり、資源という視角から開発の研究に迫る方法を思い立った。貧困が違法伐採など環境破壊を生むという定説が支配的だった当時、貧困層の活動が本当に大きな環境破壊を生むのかという疑問もあったという。

その疑問を確かめるため、現地調査として1年ほどタイの少数民族の村で生活した。現地の人々の風俗に分け入り、統計に表れない固有の資源利用の把握を目指す。違法伐採など、アンケートで分からない資源利用の実態を知るためだ。村人たちの基準に基づく「豊かさ」に応じた分類を用いて、資源の使われ方を観察した。

◇

教員となってからは、農村の実態調査よりは都市部での政策研究に軸を移す。04年末から、国際協力機構の専門家としてタイ環境省の政策アドバイザーを務めた。「資源分配は村人の調査だけでは分からない。政府のフィールドワークも必要です」

赴任中に起きたスマトラ沖地震の津波被害対策で、特に分配の重要性を痛感したという。そこには、援助の集中砲火が見られる一方で、援助の届かない人々が多くいた。例えば、ミャンマー（ビルマ）からの不法入国者らを助けようとしても、強制送還を恐れ奥地に逃げてしまう。そうした弱者に援助が行き届かず、困窮した人も多かった。

「資源は『可能性の束』です」と佐藤准教授は語る。現在の先進国の援助は、相手側の資源の不足など、問題を探して外から解決を持ち込もうとするもの。「外からの援助に頼らせるのではなく、現地にある可能性を見付けることを優先すべきです」。

「資源」というと日本では、石油など「原料」を想起しがち。だが、知恵や技術との相互作用があって、石炭・石油といったモノは初めて「資源」になる。

モノとしての資源が著しく乏しかった終戦後の日本はどのようにして発展することができたのか。佐藤准教授の目は、日本の歴史にも向けられている。

◇

新領域創成科学研究科には、系列の学部がない。学生の出身は多様で、理論物理学を研究していた人もいる。「資源の社会科学」という学際領域は日本ではまだマイナー。だからこそ、学生には他分野の人にも耳を傾けてもらえる論理の組み立てとコミュニケーション力を身に着けてほしいという。卒業生には援助機関だけでなく、マスコミに就職したり国際機関を目指したりする人も多い。大学の研究者が果たすのも時間の問題。開発への新しいアプローチは着実にすそ野を広げている。

（菱山哲平）